

連載

1960年代後半の京都大学・理学部・数学教室、そして私（6）

松本和一郎

（1966年度入学、1970年度学部卒業、1971年度大学院進学、1974年度同退学）

1. 大学院時代—修士課程—

大学院に入ってすぐの4月末（1971年、前回記事の冒頭で「1971年度」とあるのは「1970年度」の間違い）、企業に就職した同期生が「松本、給料が出た。貧乏学生はろくなものを食つとらんだろうからおごってやる」と言って何人も連絡してくれた。彼らの話を聞くと一様に「いずれ1年ほどするとシステム課が立ち上がるのだが、まだコンピューターも設置されていないので、当面は好きなように過ごして下さい」と言われたそうだ。何をしているのか聞くと、上田敏明君（神戸製鋼）は「新入の課員で佐竹一郎の“行列と行列式”を輪読している。松本、京大はレベルが高いぞ。○○大学のやつなんか、なんも分かってらん」と言うから「それは○○大学がレベルが低いだけだ」と昨日の自分を棚に上げて答えた。馬場金司君（三菱重工、さすがにここにはコンピューターが設置済みであった）は「数値計算を勉強するように言われてシミュレーションをしてみたが、どうしても力を加えた逆方向に鋼板が曲がる」。日本の戦車の質が危ない。浜田達夫君（日本航空、彼は1969年度卒）は「暇だから幾何の問題を考えて可換図の矢印を書いていたら、女子事務員が通りがかりに見てバカにする。それでは、と翌日は積分記号を書いたら尊敬の目で見られた」。竹本茂男君は「課長が‘待ち行列’を勉強したいのだが何か良い教科書はないか、と聞くので佐竹一郎の“行列と行列式”を勧めておいた」。それは違うだろうと言うと「読んでるうちに本人が気がつくわ」。それにしても当時は‘行列’と言えば無条件で“佐竹一郎”を思い浮かべた。

2回生の秋には松波哲也君（日本生命）が「秋深し、またも取ったぜ菊花賞、イシノヒカルの脚に乾杯」の歌と共に“賞金で一杯”の招待葉書をくれた。

修士課程のセミナーは水曜日であった。溝畑先生の修士課程1回生は先生の岩波書店“偏微分方程式論”第3章“楕円型方程式（初等的理論）”を輪読するのが常である。数理解析研究所の所属で松浦重武先生が指導教員の山原英男君と一緒にあった。2人がかりで、この章を終えるのに1年かかった。“初等的理論”とは思えなかった。ところが、3年下に西谷達雄君が入ってくると1人で、3章を終えて4章“初期値問題（Cauchy問題）”5章“発展方程式”6章“双曲型方程式”まで終ってしまった。とんでもない後輩だと恐れいいた。ところがところがさらに1年下に浅倉史興君が入ってくると、1人で3章・4章を終えて、次は5章ではなく8章“Green函数とスペクトル”を読みたいという。私が敬遠していた8章を、である。8章をレポートをしていて、浅倉君が「証明は読者に任せよう、と書いてありますが、証明は結構難しいではありませんか？」と問うと、溝畑先生が「いやあ、このあたりまで書いてきますと疲れてきましてね、面倒なところは、読者に任す、と書いておきましたが、易しくはありません」とおっしゃって大笑いであった。

セミナーは午後1時半に始まり、夕方5時半くらいになると先生が「このへんで置いときましょう」とおっしゃって終わる。そのあと「まあ、コーヒーでも飲んでいきませんか」との声でコーヒーを準備する。先生はコーヒーが大好きとのことであったが、コーヒーはインスタントのネスカフェで、先生自身はクリープお使いにならないせいか、瓶入りのクリープは古くなっている。私は、ブラックを飲むと胃が痛くなるので、クリープを削って使った。コーヒーを飲みながら、先生は世界の各所で出会った數学者

についてのお話をされた。ラックスが、フリードリックスが、F. ジョンが、と話題は尽きなかった。プリスが‘一意性の反例’の作り方を熱心に説明してくれるのだが、何遍聞いても分からなかった、という具合である。大変興味深く感銘を受けた。後年、先生が“解析学小景”をお書きになったので、是非私たちにしてくださった話も、人物像を主体にして続編として書いてください、とお願いした。「しまった、Leray 先生を書かなかった」と先生がおしゃったと後に奥様から聞いた。Leray 以降についてはお書きにならないまま旅立たれてしまった。先生にとっては L. Schwartz と J. Leray までがとびきり大切であったのである。Petrovsky にも大きい影響を受けたとおっしゃっていた。

大学院に上がると学生控え室は数学教室（今の3号館）の新館1階の部屋となった。留年生用のプレハブより快適だが、困ったことに教室のすべてのドアは午後5時に施錠される。教員の方々は鍵を持っているから良いが、学生は5時を回ると建物から出られなくなる。困ったなと思っていると、ある人が、北翼の地球物理学科（当時、今は数学科）の地下の倉庫に外に出る階段があり、これが24時間開いていると教えてくれた。地球物理学科には24時間を超える実験・観察があるからいつでも出入りできるようになっているのである。そんなことなら第5講義室に泊まり込んだときに窓から出入りしなくても良かったのにと思ったが、何をしてかすか分からない学生に常時通行可能な道は教えられなかつたのかもしれない。

朝は9時半頃に起きて、大学院合格の記念に買ったステレオでNHK FMの“バロック音楽の楽しみ”を聞く。皆川達夫・服部幸三両氏の語り口が今でも耳に残っている。特に皆川さんには厳しい発言が多く「パニアグアがギリシャの音楽と称してレコードを出しましたが、騙されてはいけません。ギリシャ時代には楽譜自体が無く、したがってパニアグアの演奏は推測に基づく彼の勝手な創作に他なりません」。この番組が終わると、朝・昼兼用の食事に出る。大学に出てくるのは留年時代と同じで午後1時前である。帰りは少し遅くなつて午前0時か1時であった。冬になると、午後10時頃に用務員の沢見さんがやってきて「松本さん、フロにはいらんね」と声をかけて下さる。午後5時になるとボイラーマンが全館暖房を停止させるのだが、ボイラーの熱湯を地下にあるバスタブに移して帰る。熱湯も午後10時くらいになると42度くらいでいい湯加減となる。これに入らないかというのである。ありがたい。午前0時に下宿に帰ると、百万遍角の東山湯はもう暖簾をしまつていて、入れるには入れるが湯が止まっている。湯の更新がないから湯船には人の垢の塊がプカプカ浮いている。そのうち六尺ふんどし一丁の風呂屋の親父と海パン一丁のアルバイトの大学生が棒たわしでタイル磨きを始める。それに比べると地下のフロは一番風呂である。用意しておいた桶と手ぬぐいと着替えを持って地下風呂である。地下はコンクリートの打ちっぱなしで各種のパイプが走っているから美観では劣るが、モダンアートの素っ気なさはある。おまけに、歌うとよく響く。地下室のメロディーである。まだカラオケのない頃に独りカラオケ気分であった。

私が京都大学を離れてだいぶたつ頃、数学教室の2階の廊下を歩いていると、沢見さんが廊下の油の層を削っている。数学教室の廊下にはモップで油を引いていたが、その油の層が積もり積もって、私がいた頃は暗い油の色だけになっていた。沢見さんによると、実はこの廊下は木目の美しい板張りとのこと。その美しい木目を再び取り戻すために、気の遠くなるような手間をかけて油の層の除去をなさっているのだ。その甲斐あって、今では廊下に美しい木目が蘇っている。

用務員にはもう1人北尾さんがいた。相撲の好きな私は本場所が千秋楽に近くなると連日、用務員室に入れてもらってテレビを見せてもらった。そんなとき「どうぞ」と言って北尾さんが快く用務員室に入れてくださった。

修士1回生の終わりに事務室に呼び出された。矢野さんに「単位が全くないので、このままだと奨学金が止まりますよ」と言われた。あわてて溝畑先生に相談に行くと「いやいや、忘れていました」と言って受教簿になにやらたくさん書いて下さった。「松本

君、これで博士課程の終わりまでの単位がありますよ」とおっしゃってハッハッハと笑われた。

2回生のはじめに溝畠先生から修士論文のテーマをどうしたいか聞かれた。「線形偏微分方程式の初期値問題の解の一意性」にしたいと言うと、「一意性は歴史的に見て解決の機運にないから止めた方が良い」とのことである。先生独特の歴史展開に対する嗅覚である。ところが、私は情けないことに歴史を追いかける形で論文を読み込んだテーマは一意性しかなかった。結局「では、半年やってみて、成果がなかったらそこで考えましょう」ということで落ち着いた。

はじめに先生が提案した1, 2の問題は3日くらいですぐ解けてしまつて修士論文にはなりそうもない。そんなある日、先生は腹を決められたのか、「Calderón の論文と、私の4階楕円型方程式の論文と 溝畠-大矢の Levi 条件の論文を読んではいかがでしょう」とおっしゃった。「Levi」条件とは、特性根が実数の主要部（双曲的）に対して初期値問題が C^∞ 適切となるための低階に対する条件のことである。はじめの2つは既に読んでいたので、溝畠-大矢さえ読めば良い。先生は「溝畠-大矢の論文は否定的結果を導くのに使えるでしょう」と付け加えられた。

溝畠-大矢の論文は、偏微分作用素の主要部が冪乗になっているとき、適当な条件の下で、1階下の項まで含めた作用素のシンボルを Puiseux 展開するものである。主要部が楕円型ならば Puiseux 展開後も楕円型で、特性根が单根になる。すると特性根が单根であることを仮定した Calderón の計算が使って、残りの項が Puiseux 展開よりも2階低いことを併せると、一意性が示せる。どう考えても肯定的結果になる。そもそも、この手法は不等式を導くために有効で、不等式を用いて示せるのは十分性だけである。必要性は反例を構成することしか示せない。（この事情は今も変わっていないと思う。）先生の指摘は言い間違いなのか、教育的ブラフであったのか不明である。すべてがうまくいっていると確信できたのは年の暮れも押し詰まってからである。年が明けると、修士論文の締め切りに向けて夜に日を繰いで手書きの修士論文書きである。時間がないから清書などしている暇はない。初めて書くものが提出論文である。下宿にこもって電気コタツにしがみついて書いて書いて書きまくり、疲れると後ろにひっくり返って眠る。腹がへったら近所の学生食堂に行って時刻に無関係に飯を食う。後はトイレに立つだけでひたすら執筆に時間を注いだ。さいわい、締め切りの前日遅くにできあがって溝畠先生にご覧に入れる暇もなく提出した。コピーを2部取っておいて、先生には翌日コピーをお渡しした。

修士論文の発表会の朝、先生の部屋の前で先生にばったり会った。先生は「忙しくてまだ読んでないんですよ。審査が終わったら読みましょう」とおっしゃった。何かアドバイスを期待していた私ははぐらかされた。

先生は火曜日に開かれている研究者向けのセミナーで修士論文の結果を発表するように手配された。発表はうまくいって意気揚々としているところに先生が来られて、うれしそうに笑いながら「みなさん、半信半疑でしょう」とおっしゃった。決して手放しで褒めることのない先生であった。

修士論文の結果は、主要部が双曲系の場合も含むように拡張して正式の論文になった。私の最初の学術論文である。当時は手動タイプが主流で、私も手動タイプで論文を打った。原稿ができあがって先生のところに持っていくと、第1ページ第1行を読んで「これはどういう意味ですか?」と問われる。「これこれこういう意味ですが」と答えると「英語でこういう風に言いますか?」。もごもご口の中でフランス語を言われて、「英語ならこう言うではありませんか?」。次に「第2行はどういう意味ですか?」。結局、「イントロダクションは私が書きましょう」とおっしゃった。私の第1論文はイントロダクションだけ格調が高い。連載(2)の終わりのところで触れた学会発表はこの成果である。

第1論文が多く引用されたので、かなり長い間この論文を超える論文を書くことができなかつた。

2. 大学院時代一博士課程一

修士論文が合格だったし、まだ納得のいくまで勉強した気がしていなかったので、博士後期課程への進学を希望し、認めていただいた。博士課程のセミナーは金曜日であった。博士課程にはたくさんの方々が在籍していた。在籍学年は思い出せないからランダムに書くと、猪狩さん、長谷川幸子さん、二宮さん、竹内さん、伊吹君で、山原君と私が加わった。1年後に浦部治一郎君が東大の修士課程から戻ってきた。それらの方々が持ちネタを持っていて、セミナーでの発表は極めて活発であった。特に、猪狩さんは‘無手勝流’と称して、私の予想もしない結果を報告されるのでワクワクした。長谷川さんは‘グルサー問題’を追いかけ続けて、長い年月をかけてその結末にいたった。その全過程に立ち会えたことは幸せであった。浦部君は古典籍の大家で、我々が研究成果を発表すると「そんなん○○に書いたる」と言う。○○にはアンペールだのピカールだの（記憶は確かでない、とにかく歴史上の大数学者）が入る。現代の知識にも疎くてキュウキュウしているのに、古典まで手が回るわけがないから、彼の主張が正しいのかどうか確かめたことはない。溝畑先生が「知られている結果ですね」とおっしゃらないから論文にしても良いのだろうと無責任なことであった。

博士課程の2回生のときの4月であったと思う。吉沢先生に呼ばれて研究室に伺うといきなり「君らは後輩に何を伝えたのだ」と一喝された。その年、学部に上がった学生が来て「どういう風に履修科目を選んだら良いか分からぬから重要な科目を選定して必修科目にして欲しい」と言ったそうである。「君らが各自で学習計画を立てたいから無くせ、と言うから必修を無くしたのに、これはどういうことだ。君らは何を後輩に引き継いだのか」。全共闘（系）の弱いところである。自然発生的に闘争が組み上がって、自発的に個人の判断で参加するから、組織としての記録がない。本人達はそれで良いと思っているが、後に続く人は直には経験していないのだから、記録がないと先達がどこから来てどこへ行こうとしているのか分からぬ。彼等の行動が適切であったのか、引き継ぐべきものがあるのか、分からぬ。

このことについて思うことがある。現政権になってから国会で「記録は適法に処分しました」「書類は作成していません」との発言が続いている。政策の妥当性を検証するために一番大事な「記録して、後世にことの顛末をつまびらかに伝える」ことを放棄している。それどころか、記録の改竄まで指示した人を財務のトップに栄転させた。およそ文字の文化を持った国とは思えない愚行である。国民を騙す政府が外国との信義を守ると誰が思うだろうか？国際社会で日本が軽んぜられるわけである。

伊吹君は教養部からの同級生であるが、大学院には私が1年遅れて入った。だから私が博士課程2年目は彼の3年目である。当時は博士課程に3年まるまるいることは名誉なことではなかった。修士課程終了時、遅くとも博士課程の途中で助手のポストを得るのが普通であった。解析の分野は助手に採用されるのが相対的に遅い傾向があったが、博士課程3年をまるまる在籍する人はまれであった。そんな中、伊吹君は3年目も押し詰まって年が明けると、「先生から未だに何の話も無い。他の大学に採用された人に聞くと前の年の12月までには就職の話があったそうだ。きっと博士課程留年になるから来期の学習塾講師を引き受ける」と言う。溝畑先生の講座の助手のポストが1つ空いているし、優秀だし「京大の助手になるのだから、他大学の助手の決定とはプロセスが違うのだろう」と言ってもあくまでも来期の塾講師受諾の返事をするという。溝畑先生は決まっていないことに関しては極めて口が堅い。しかし、ここで塾の講師を受諾してしまったら、助手に採用されたときに代理を探すのが大変である。こういうときは、必要な情報を適宜下さる永田先生に聞くに限る、と判断して永田先生の研究室を訪ねた。開口一番「伊吹君が就職が決まらないから、新年度の塾講師を引き受けると言ってるんですが」と言ったら、ニコニコ笑われて「うん、大丈夫だよ」とおっしゃる。やっぱり大丈夫なのだと合点して「ありがとうございました」と言って部屋を出ようしたら、「君

のことは知ってるの?」と聞かれた。何のことやら分からずに「はあ?」と言うと「うんうん、楽しみにしていなさい」とおしゃる。なにやら狐につままれたような気持ちで退散した。

これだけ傍証を固めてやったのに伊吹君は「溝畠先生は何もおっしゃらない」と言って来期の塾講師を受諾してしまった。それから数日して、夕刻に伊吹君と2人で数学教室(現在の3号館)旧館南の出入り口から出たところで溝畠先生に会った。満面の笑みで「2人とも4月から助手です。協議会で今決まりました」とおっしゃった。これには私も驚いた。永田先生の言葉からして何かあるとは思っていたが、私が滑り込む京大助手のポストは無いと思っていたから、一瞬どこの助手になるのだろうと思ったのである。しかし、京大理学部の協議会で決まるのなら京大の助手であろう。実は、その少し前に急に猪狩さんが愛媛大学の講師に転出することが決まっていたのである。

公務員のアルバイトが厳しく禁じられるようになっていたそのころ、伊吹君が塾講師をするわけにもいかず、代わってくれる人を探すのに苦労したのは言うまでもない。それにしても、「確実な証拠が欲しい」と言って、伊吹君が京大助手になったことを両親に連絡したのは4月の給与を受け取ってからである。(当時は給与が現金手渡しであった。)慎重すぎる御仁である。

私が助手になったことを最も喜んでくれたのは母であった。「先生方に楯突いたのに京都大学は心が広いもんだねえ」と何度も言っていた。「全共闘運動に与した」との理由で、退学処分になったり、見張りが立っていて所属の学科の建物に入ることを物理的に阻止された事例が多々あった時代である。

父は、私の大学進学の際に、医学部を選ぶことを望んだが、血を見るとおしりがキュッと締まってしまう私はこの希望を拒否して‘解剖’のない理学部物理学科に行きたいとがんばった。ついに父が「理学部にいって良いから博士になれ」と折れた。(入学後すぐに希望を数学科に変更した。)幸い助手になれたし、後に博士号もいただいて、少し父の希望を叶えることができた。

3. 助手時代

助手になる4月の冒頭に理学部事務室に呼び出されて、宣誓書に署名するように言われた。読んでみると「国法を遵守する」とある。ああ、もう無届けの渦巻きデモはできないな、と観念した。

助手になってすぐ、溝畠先生に呼び出された。「博士後期課程を3年在籍し、単位取得退学すると在学12ヶ月を1年と數えますが、中途退学ならば15ヶ月を1年と數えます。だから君は博士後期課程に1年だけ在籍したことになります。しかし、博士課程修了に必要な博士論文以外の単位が揃っていて、極めて優秀であるとの指導教員の推薦があると、12ヶ月を1年に数え直してくれます。君の在籍年数も2年となります。たった1年の違いですが、給与の等級の昇級に最後まで響き、退職金まで考えると相当の差が出ます。申請してはいかがでしょうか」とのことである。「お手を煩わせてすみませんがよろしくお願ひします」と言うと、「事務にサンプルがありますからそれを参考にして推薦書を書いてください」とのこと。先生としては手抜きで、私が私の推薦書を書くのである。それも「極めて優秀」と書かなければならない。なんともこそばゆいものではあるが、「相当の差」のためならやらざるを得ない。生涯でただ一度、自分を褒めちぎった文章を書いて、それが文部省に行って、めでたく2年在籍と数え直してもらった。今もらっている年金にも、先生のご厚意と私の文章力が若干は寄与しているのだと思う。それにしても、修士1回生の末に溝畠先生に受教簿に書いてもらった、ほとんど身に覚えのない単位がここで役に立った。

助手だからほぼ毎年演義を担当する。私は、学生に演習問題を解かせた上に、テキストの輪読もしたから極めて拘束時間が長かった。履修する学生にとっては耐えがたいも

のがあったのかもしれないが、学生の定着が悪く、はじめは20人くらいだが終わり頃には10人を切ることが多い。特に、女子学生には避けられて、演義を11年（当時は通年科目）担当したが女子学生は‘延べ2日’である。‘2人’ではなく‘2日’である。つまり、ある年1人の女子学生が来て翌週から来なくなった。またある年、1人の女子学生が来て問題を解いたので、定着を願って優しく誤りを指摘したら、翌週から来なくなった。それがすべてである。数学を学ぶ女子学生が極めて少ないというわけではなく、同僚の田端正久さんの演義にはしかるべき数の女子学生が毎年いた。

（龍谷大学に移ってからも、22回の卒業研究（毎年8人前後）に女子学生は4人だけという余人を寄せ付けない記録を持っている。そのうち3人は女子学生に人気の解析系教授が海外に行っていなかった年である。）

そんな演義であったが、自慢できることが1つだけある。私の演義を受けた学生（最後まで残った学生）の半分前後が研究者になった。それが彼等にとって幸せにつながったかどうかは知らないが、極めて高い打率である。森脇淳君の学年は“7人の侍”といって、このほか優秀な7人が残った。専門外のことでもちらが教えてもらったこともある。たしか7人中6人が研究者になったと思う。研究者養成を大きな目的とする京都大学数学教室においては望ましいことであろう。

助手の義務といえば、研究と演義の担当（木曜日）とあとはセミナーへの出席である。溝畠先生の主催するセミナーは、月曜日が特別研究（4回生）、火曜日が専門家向け、水曜日が修士課程、金曜日が博士課程である。セミナーには溝畠先生、島倉紀夫助教授、宮武貞夫講師、そして私ともう1人の助手（こちらは伊吹和彦君、西谷達雄君、大鍛治隆司君と入れ替わっていった）が全員出席する。このうち、講究と修士課程のセミナーは毎年同じ内容であるから、正直言って飽きてくる。教員が5人も揃って出席する必要も無いだろうと思って、ある年の4月に「講究と修士のセミナーは欠席させていただきます」と溝畠先生に申し入れた。今から思うと大胆すぎる行動であったが、先生は「そうですか」とおしゃっただけだった。おかげで研究に割く時間は極めて多かった。幸せであった。

助手になった年度の年明けに、旧館2階の溝畠先生の部屋の前を歩いていたら阪大助教授の井川さん（当時、現同窓会長）が後ろから近づいてきて「松本君、君は税金を払うとらんやろ」とおっしゃる。何のことやら、「税金は給与から天引きです」と言うと、「馬鹿野郎！研究者の税金はセミナーでしゃべることや。君は今年はまだ1回もしゃべっとらんやろ」と一喝された。この当時の（今でも）井川さんは当たるを幸い難ぎ倒す勢いであったから、「逆らう」という選択肢は思いつきもしなかった。エラいことになってしまった。残り2ヶ月余の間に研究成果を出さなければならない。その頃、山原君が、変数係数1階線形偏微分方程式系（解がベクトル、係数は行列）で、特性根が実で多重度が一定の場合の初期値問題の適切性について、「Levi条件の候補」を提案し、これが必要条件であることを示していた。また、特性集合上で1階部分のシンボル行列のランクが変わらなければこの条件を満たす低階が存在し、十分条件になっていることも分かる。しかし、ランクが変わる場合、この条件を満たす低階が必ず存在するのか、またこの条件は十分条件にもなっているのか、という点については分かっていなかった。私が「この条件が係数の導函数を含むのだからこれを係数に関する微分方程式と見れば何か情報が得られるのではないか」と山原君に言っていたのだが、彼が採用しなかった。他にすぐできそうな問題を持っていなかったので、山原君に「この問題を俺がやるぜ」と断つて取り組んでみた。ほどなく、この条件を、係数の比を未知函数とする特性曲線に沿った常微分方程式に書き直すことができた。さらに、常微分方程式の解の延長定理により、この条件下では特性帯に沿って特性ベクトルの滑らかさが保たれることが示せた。同時に、滑らかさを保たない主要部の例も構成できて、この条件を満たす低階を持たない主要部の存在が示せた。また、係数が‘無限次の零点’を持つ場合、この条件を満たしつつ C^∞ 適切でない例も構成できた。すなわち、この条件は適切性の十分条件にはなっていない

ない。この結果を整理した論文で博士号をいただいたのだから、人生は分からぬものである。叱られたら財産と思わなければいけないことを学んだ。なお、博士論文の空間多次元の場合の結果は隔靴搔痒の感があったが、幸い、その点も数年前に満足のいく結果を得て海外の研究会や日本数学会で報告することができた。

助手になって1年間は浮かれて研究が思うように進まなかった。研究に身が入らないならば懸案の結婚をしようと思い、幸いに1年目の3月に結婚できた。媒酌人を溝畠先生ご夫妻にお願いした。結婚式の翌週、家内を伴ってお礼に先生の研究室を訪れたら、「いい機会だから新婚旅行にフランス留学をしなさい」と業務命令兼媒酌人命令である。これは断れないと観念した。現代数学の発祥の地である西欧の文化をこの目で確かめたいという気もあった。とはいえ、フランス政府給費留学生（ブルシエ）の試験を受けるとなると、フランス語を勉強しなければならない。2度目の大学院入試の面接で語学について何でも言って合格させてもらった中に「教養部に通って初級フランス語を受講する」というのもあったから、修士1回生のときに教養部のフランス語を半期だけ受講していた。しかし、これでは役に立つまいと思い、東一条にある日仏学館に通った。幸い、私にとっては発音が英語よりはるかに楽であった。だいたい、英語には“あいまい母音”などという九州人には受け入れがたいものがあり、“ア”だけで4, 5種類（もっと？）も使い分けるという。たった1つの“ア”ですまして日本人が英語をマスターするというのが至難なことは自明である。その点、フランス語は綴り通り発音すればよいかから楽である。語末の文字は発音しない、とは言うが、発音しない文字に法則性があるから数学者向きである。というわけで、フランス語かぶれになって très bie～n の生活にめり込んだ。

溝畠先生によると、駐日フランス大使館の科学参事官は長いことデュピュイ氏で、面接で「フランス語で‘連續’の定義を言え」などのフランス語能力の試験を課すのだそうだ。それで「フランス語で‘ヒルベルト空間’の定義を言え」などの予行演習をたくさんしてもらった。

試験当日になって判明したことだが、駐日フランス大使館の科学参事官が前年からジャコウ氏に替わっていた。面接官は氏の他に日本人が2人、数学教室の山口昌哉先生と京大医学部の教授、であった。面接冒頭でジャコウ氏が「フランス語が苦手ならば英語でしゃべって構わない」と言う。話が違う！ ジャコウ氏の質問は‘連續’や‘ヒルベルト空間’に行かず、「あなたは博士号を持っていますか？」「いいえ」と答えると「近々取れますか？」「近々取る見込みはない」と答えると、横を向いてしまった。そのとき山口先生が日本語で「松本君、あかんで。フランス人は博士号を重視するんや。博士号を取れる見通しがない、など言ってはダメだよ。言い直しなさい」と言う。ジャコウ氏は日本語が分からぬのかもしれないが、大胆なものである。こちらも、これはいかん、と思って、「私は日本で博士号を取る気は無い。フランスで取りたいのだ。だから留学を希望しているのだ」と言ったら、ジャコウ氏がこちらに向き直った。「フランスの博士号は難しい。1年ではとても取得できない。しかし、ブルシエの期間は1年で延長はできない」と言うから「それなら2年目以降は自費で残ってでもフランスで博士号を取る」と言ったら、医学部教授の面接官が「Vous êtes riches！」。何とか面接が終わった。

数学教室に戻って談話室（旧第5講義室）にいると、山口先生がおいでになって「君、関西の補欠の1番や。関東の合格者が少なかったら浮かび上がる」とのことであった。私にとってはありがたいことに、関東では東京の大学に所属する受験者の合格数が極めて少なかった（0だった？）。聞くところによるとジャコウ氏は地方重視主義者で、日本の地方大学からの受験者・フランスのパリ以外の大学への留学希望者を優先するのだろう。東京の大学からの受験者がフランスでの研究計画を聞かれ、答えると、軒並み「その研究計画ならば東京にいてできますね」と切り返される。東京の人々は正直だから「そうですね」と答えて不合格となる、とのことであったが定かではない。

私が4回生のときのストライキ中に山口先生は工学部から理学部に移ってこられたように記憶している。だから当初はなじみが薄かった。しかし、先生はストライキ中に課題となった「数学は自然科学か?」という問題を積極的に受け止めて、この課題に考え方を持つ人を呼んできて話し合う機会をつくって下さった。もともと仏教とか数学教育とかにも広く活動しておられたようである。ストライキ中は1学年下の理学部闘争委員会のメンバーによる数学基礎論の自主ゼミにつきあっておられた。

大学院・助手時代に、廊下で出会った折に「こんな研究結果を得たのですが」と言うと「おもろいな」と必ず言われた。先生はある時期、線形偏微分方程式の研究もなさつていて、笠原-山口：定数係数線形双曲型偏微分方程式系における強双曲性の特徴付け、の論文がある。だから先生の励ましの言葉には大いに勇気づけられた。

平成元年に龍谷大学理工学部ができたが、このときに山口先生は数理情報学科の設立責任者として私に声をかけて下さった。私は助手から突然、教授になった。

さて、滑り込みの合格でフランス留学が決まった。研究室を共同で使っていた田端さんと一緒にいた。2人ともCIES以外の組織から2年目の奨学金を獲得できて2年間パリにいた。ほかに京大数学科の卒業生で樋口功さん・中岡明さんも同じ年のブルシエである。樋口さんはパリで、中岡さんはレンヌであった。1年後に西谷達雄君もブルシエでパリに来た。招待教授として大矢勇次郎先生、島倉紀夫さんもパリに来た。岡田正巳君はマリアヴァンの助手としてパリ6番大学で働いていた。この頃、パリに京大関係の偏微分方程式研究者が集まっていた。



留学先の École Polytechnique の学生寮（文末註1参照）

留学2年目の年明けの2月に招待講演でパリに来られた溝畑先生を囲んでパリの喫茶店に入った。島倉さん、西谷君、私の他に、イタリアでの集中講義を終えた宮武貞夫さんもいた。溝畑研究室の全スタッフが揃っている。溝畑先生が「今日は修士論文の発表会ですねえ。山口君はうまくやってくれたでしょうか」とおしゃった。この年M2だった溝畑研究室の学生からは研究者は出なかった。

フランス留学が決まって plan d'étudeなどをフランス語で書いて駐日フランス大使館に提出しなければならなかつたが、外国語の苦手な私は作成に苦労した。そのとき助けて下さったのが島倉さんだつた。大量の書類をフランス語で書くことにうんざりした私が嫌気がさした顔をしたら、「松本君、ただでお金をもらおうというのだから応分の苦労は仕方がないよ」とたしなめられた。「成果を得るには応分の努力が必要である」という、当たり前のことだがすぐ忘れてしまうことが、このとき私の中に定着した。留学中

に C. R. Acad. Sc. Paris に 2 本の論文を書いたが、そのフランス語も島倉さんに大幅に直していただいた。

フランスでの指導教員は Charles Goulaouic 教授だったが、私が帰国してすぐに 45 歳の若さで亡くなった。追悼論文集を出すに当たり、溝畠先生経由で弟子の私も書くように依頼があった。フランス留学中にグーラウイック教授の研究グループで話題になった‘時間に比例して遅れが増大する偏微分方程式の初期値問題の適切性’についての論文を書いた。思い入れがあるのでフランス語で書くことにこだわった。フランス語の論文は間接法で書くのが習慣だそうだが、論文を書く作法をよく知らないし、島倉さんに相談する時間もなかったので、直説法で書いて投稿した。発刊までに時間がなかったのでそのまま出たが、発刊の責任者の Claude Zuily さんが「ひどいフランス語だ」と怒っていたと人づてに聞いた。それ以後、フランス語で論文を書くことはしないことにした。

私にとってはヨーロッパ留学の経験は人生の見方を変えるほど大きかった。旅も良くてした。研究機関への招聘と私費旅行を併せると 700 余日の滞在期間の半分ほどが旅の空であった。文部省の在外研究員の立場だから東欧圏に行くことははばかられたが、西欧圏では小さな国を除くと、ギリシャとポルトガル以外の国をみな訪れた。あちこちの大学から招待された 1 週間の滞在に‘文化視察’の 1 週間を付け足す、というパターンが多くかった。いろいろな国の大学を訪問した経験から、数学的成果に対する評価が国ごとに大きく違うことに気がついた。世界の誰もが褒める仕事、ある国では高く評価されるが別の国では評価の低い仕事、ほぼ誰も振り返らない仕事とクラス分けできる。自分の現在手がけている仕事がどのクラスのものかあらかじめ予測しておくことは有意義である。二番目のクラスの仕事は持って行く国を選ばないと嫌な思いをする。

美術の好きな家内が行く先々の美術館を調べておいてくれたので、行き先のめぼしい美術品で見のがしたものはない。ヨーロッパ各地の美術館での感動と、パリで通い詰めた Radio France の中世・ルネサンス音楽の公開録音での感動は生涯の宝である。(当時は、本格的な古楽器・古楽奏法による中世・ルネサンス音楽の演奏の勃興期で、Radio France が公開録音とその放送によって啓蒙していた時代である。)



科学参事官ジャコウ氏を囲んで（文末註 2 参照）

留学から帰国してからも話題は尽きないのだが、溝畠研究室内のことや私個人のことになってきているから、このあたりで切り上げる。

連載は今回で終了するが、書き残した「思い出」を「思い出集 [連載補遺]」として次回投稿する。

2020.7.3

註1 私の留学先はエコール・ポリテクニークの数学センター (Centre des Mathématiques)。EP (略称 “X”) は軍の学校で、革命記念日の軍事パレードの先頭は EP の学生の隊である。学生はこのパレードのために寒い頃から行進の練習をする。入学時、学生は全員寮に入る。4 階建ての寮の側壁に学生が絵を描く。1981 年の冬のある朝登校すると、学生寮の壁いっぱいに最初の絵：映画「七年目の浮気」のモンローが通気口の上でスカートを押さえるシーン が忽然と出現していた。それまでずっと無地の壁だったので、早朝の一瞥は衝撃であった。絵は時々描きかえられる

註2 1980 年 6 月 1 日 在日フランス大使館科学参事官の任期が終了して、フランスに帰国したジャコウ氏がパリ在住の日本人ブルシェを自宅に招待